

書 評

家 族 療 法

三 和 啓 二*

Keiji MIWA

1980年代に入り、我国では、家族療法に関する本が、百花繚乱の如くに出版され始めた。訳本が多く、日本の著者による本も増え始めている。

家族療法という名称が日本に初めて書名として登場したのは、ヴァージニア・サティア著、鈴木浩二訳「合同家族療法」(岩崎学術出版社、1970、原著は1964)であろう。同じ出版社の精神分析双書第1期20冊の中で4冊が家族療法に関するものであった。即ち、N・W・アッカーマン著、小此木・石原訳「家族関係の理論と診断(1967)」・「家族関係の病理と治療(1970)」(原著は1958)、アッカーマン他編、岩井訳「家族治療の基礎理論(1969)」(原著は1961)と前述の本である。アッカーマンは、既に1937年から、そうした研究論文を書いてきている。一方、日本人では、井村恒郎による精神分裂病の家族研究が1965年に公にされ、1970—1974年に亘る共同研究が発表されるようになる。小此木啓吾他「児童治療における並行母親面接」(1969)、鈴木浩二「家族精神療法」。鈴木浩二・牧原浩「一分裂病家族に関する家族療法的試み」(共に1978)、市川潤「うつ病の家族療法」(1979)等の論文が次々に発表されて、ついに1983年、鈴木浩二「家族救助信号—家族システム論と家族療法—」(朝日出版)が発刊され、今まで季刊精神療法に掲載された論文を集めた河合隼雄他編「家族精神療法」(金剛出版、1984)も発刊された。こうして1980年代に入って、家族療法関係の本が一気に出版されるようになってきたのである。

まず、日本家族心理学研究会(後に、学会)の機関誌「家族心理学年報」(金子書房)が、1983年から毎年刊行されて、家族療法の論文を多数掲載している。

それに続いて、日本家族研究・家族療法学会の機関誌「家族療法研究」(金剛出版)が1984年から毎年刊行されている。あわせて、同学会のセミナー委員会が、「家族療法セミナー1『家』と家族療法」(金剛出版、1987)

を刊行している。

異色な所では、家族画研究会が1982年から毎年開催され、ついに家族画研究会編「臨床描画研究I」(金剛出版、1986)を刊行している。それ以後も、毎年刊行されている。

上述した学会、セミナー委員会、研究会が発行する雑誌や本以外にも、多数の訳書や、少しずつ増えてきている日本人の著書が見られる。それらの本のほとんどすべてが、先述の「家族療法研究」誌の書評欄で、毎号三〜七冊取り上げられている。評者がここで取り上げる最初の本は、既に書評されているが、どうしても、入門書として採用しなかった。他の二冊は、まだ上記の雑誌では取り上げられていないので紹介することにした。

以下に紹介する三冊の本の選択基準は、1) 評者が、著者の家族療法のお話を、直接うかがい、その人となりをおぼやかながらでも知っていること、2) 訳書でなく、原著であること、3) 著者が臨床実践家であることの三点とした。

遊佐安一郎著『家族療法入門——システムズ・アプローチの理論と実際——』(星和書店、1984、270頁)

本書は、名大(医)の笠原嘉教授によって推薦されている。著者は上智大(英)を卒業し、ICU 大学院(教育心理)、ニューヨーク州立大大学院を経て、Ed. D 取得。ニューヨークの精神科医療センターで臨床心理士として治療に従事し、家族療法家として成長され、本書執筆当時は、キングズ・パーク精神科医療センターに勤務しつつ、アッカーマン家族療法研究所において、更に訓練を積み重ねている。

本書の構成は、推薦の辞(2頁)、第一章 家族療法(12頁)、第二章 システムズ・アプローチと家族療法(50頁)、第三章 ボーエンの家族システム理論(44頁)、第四章 ミニューチンの家族構造療法(58頁)、第五章

* 八事病院
Yagoto Hospital

MRIの家族相互影響アプローチ(70頁),第六章 家族セラピスト(20頁),付録I 注釈付英語参考文献,II 米国家族療法訓練施設(20頁),あとがき(2頁),索引(人名1頁,事項3頁)図26・表4である。

本書は,米国の家族療法を日本に紹介する意図で書かれた。その中でもMRI(メンタル・リサーチ・インスティテュート)のスタッフは,森田療法の「あるがまま」や禅の教えに関心を示し,自分達のアプローチと類似していると考えていることから,著者が,本書を「東洋思想の米国化を含む家族療法の日本化」という相互影響の歴史の一片ととらえ,本書で扱う円環思考やバンクチュエーション(後述)と結びつけている点が興味深く感じられた。

家族療法とは,家族を治療の対象とするものと一応呼べるが,患者や家族の一員との個人療法や二名以上の家族構成員,さらに二家族以上を同時に扱う集団療法形態もあり,定義は,個々のセラピストが各々の体験と理論的理解を深めるたびに修正されていくものであろうと述べられていることから,まだまだ,これからもっと発展していく分野であるとの印象を強く受けた。

家族療法は,精神分析的・行動学的・システム論的家族療法の三つに大きく分類できるが,本書は第三番目を紹介する本である。数多くの学派のうち,米国家族療法学界で最も伝統があり,最も影響力があることに加えて,個別的特色を持つ三つのアプローチが第三,四,五章で解説されている。その各章が一冊ずつの本に匹敵すると評者には思えたので,かなり詳しく述べることにする。

その前に,第二章は,システム論的家族療法の理論的基礎としてのシステムズ・アプローチを理解する為に書かれている。生物体システムを七つのレベル(A:細胞~G:超国家まで)に分け,上位階層をスプラシステム(Supra system),下位階層をサブシステムと呼んでいる。ミラーは,物質-エネルギー,または情報を扱うサブシステムを19に分類している。その中で,「境界線サブシステム」は,家族の門番であり,その典型は両親である。その両親に受け入れられなければ,セラピストは無効であり,家族療法の継続はできない。よって,家族療法にとって「境界線サブシステム」は,大変重要である。このように,今まで我々が使い慣れた言葉を,一旦システムズ・アプローチの言語に翻訳し,整理し直す必要があるということの評者は感じた。

第三章は,ボーエンの「家族システム理論」である。これは,システムの三属性(発達,構造,機能)のうち「歴史(発達)」に焦点をあてた理論である。ボーエ

ンは,従来の精神分析学の影響を多く受けており,比較的オーソドックスで,地味なアプローチをしている。彼のアプローチは,技法よりも,理論に基づくセラピストの自己理解を重視する。

ボーエンの家族システム理論は八つの基本的概念の組み合わせで,家族システムの「集合性-個別性」や「知性-感情システム」の均衡の過程を説明しようとする。その八つの概念とは,1)三角関係融合関係と遊離関係で成立,2)核家族の感情過程 感情遊離・夫婦衝突・配偶者の不適応・子の損傷の四つ,3)家族投影過程 両親の融合が子に伝播,4)分化の尺度 感情と知性の分化の完全融合から完全分化まで四段階,5)多世代伝達過程 基本的分化度あるいは融合度の多世代伝達,6)感情的切斷 源家族との融合関係による不安の一次的解決法,7)同胞での位置 実際の位置や機能的位置が分化度に影響,8)社会的感情過程 1)~7)の諸概念の社会システムへの応用の八つである。このうち,多世代伝達過程が最も特徴的である。図12に第五世代までの系譜を例示し,低い分化度の系譜に精神病等が生じると言う。セラピストの機能は,1)夫婦間の関係を明確化させる,2)非三角関係を保つ,3)感情システムの機能を教える,4)「アイ・ポジション」(I position)的立場をとる,即ち,十分に分化した人間がとる態度をとる,の四つである。そして,セラピストは,不安の解消と基本的分化度の向上に助力する。従って,セラピストの訓練では,自分自身の源家族の理解と,自らの分化度を高めることが重要となる。

評者は,アルコール依存症の家族治療に携わることが多く,こうしたボーエン派の多世代伝達過程に示される事実を,臨床経験の中で数多く見てきているので,大変よく納得できた。

第四章は,ミニューチンの「家族構造療法」である。これは,システムの三属性のうちで,「構造」を重視したアプローチである。ミニューチンは,アクションに富み,積極的で,カリスマ性を備えている。たった1~2時間のセッションで,素速く家族の問題点や独特のスタイルを把握し,あつという間に家族の構造を変えていくさまは,マスター・セラピストを超えて,魔術師と言えらるかもしれないと著者は述べている。ボーエンが精神分析学から始めた精神科医なら,ミニューチンは小児科から始めた精神科医であり,大学教授も務めた。

ミニューチンの家族療法では,その家族の支配的規約を抽出する。そうした構造を理解するために,三つの準拠枠がある。1)「境界線」あいまい・明瞭・固いの三つに区別され,網状態と遊離状態の両者がある。2)「提携」

連合と同盟の二種類がある。3)「権力」絶対的でなく、場合により異なる。ミニューチンは家族構造図 (Family Map) を使用し、上記の三つの準拠枠を図示している。また、家族地図 (Chorography) を用い、セラピー場面の席を図示している。これらは、家族の構造を視覚的に把握するのに、大変便利であると評者には思われた。一方、治療構造としてはビデオカメラとマジックミラー設備が完備されており、他にセラピストとスーパーバイザーとのコミュニケーションのためのインターコムが設置されている。評者は、かつて見た NHK TV 講座における、浜松医大の石川元氏解説による家族療法の場面の映像を思い出した。こうした設備や人材を得るには、どこでも実施できるわけではないという制約を感じた。本章には、かなり詳細に技法紹介が事例を通して記述されている。セラピストの「関与の促進」と「関与の中心化」を基本に、I 交流の創造 1) 枠組みづけ、2) エナクメント、3) 家族内の課題設定、II 交流との合流—ジョイニング 1) トラッキング、2) アコモデーション、3) マイム、III 交流の改造 1) システムの再編成、2) 症状焦点化、3) 構造改変、の三つの技法がそれである。用語の意味については、あとで事典を紹介することにしよう。セラピストの訓練は四段階に分類され、自己理解よりは、セラピストとしての機能の発展が重視される点で、ポーエンとは異なる。

この治療法が適用されている行動障害や心身症の分野では、IP (Identified Patient) の過半数を子供が占めており、神経性無食欲症は88%、喘息は100%の成功率を誇っていて、その効果には目を見張るものがある。

第五章は、MRI (Mental Research Institute) の「家族相互影響アプローチ」(The Interactional View) である。これは「コミュニケーション・アプローチ」とも呼ばれる。なぜなら、システムの三属性のうちで、「機能」に焦点をあてているからである。MRI の短期の戦略的家族療法は、広義の一般システム理論と G. ベイトソンのサイバネティック 認識論の強い影響を受けている。文化人類学者の G. ベイトソンが1956年に発表した「二重拘束 (ダブルバインド) 仮説」は、MRI の戦略的な「治療的二重拘束」の基本となった。MRI はサリバンやフロム・ライヒマンに影響を受けた精神科医ジャクソンによって1959年に設立され、ソーシャルワーカーのサティア、コミュニケーション・スペシャリストのヘイリー、臨床文化人類学者のウィークランド、ユング派の分析を受けたサイコロジストのワツラウィック、サイコロジストのボーデンなど、多彩な背景を持つスタッフと共に家族研究・家族療法訓練のメッカとして発展してき

た。

そして、MRI のコミュニケーション理論を適用する短期治療センター BTC (Brief Therapy Center) が1967年に開設され、最高10セッションで治療を完了しようと試みた。その中でも、ウィークランドとワツラウィックは、MRI 独特のパラドックス療法の中心人物として有名である。このパラドキシカル・アプローチについては、二冊目の紹介に譲ることにする。さて、コミュニケーション理論でよく出てくるパンクチュエーションという言葉に評者は注目したい。情報交換の連鎖の相互作用のどこに句読点を打つかで人間関係が規定されると述べられ、図26にわかり易く示されている。それは、評者が夫婦療法の臨床経験の中で、互いに相手に責任をなすりつけ合う場面に何度も遭遇し、“鶏と卵” だなとも感じてきたことを、見事明解に説明してくれた。

BTC における MRI 短期療法の効果は、成功例40%、改善例32%の合計72%の成功率であり、他の長期療法の結果と大差ないと述べられている。こうした統計を出すことによって、家族療法は、その実力を示し、発展してきたのであろう。

第六章は、家族セラピストというタイトルで、ポーエン、ミニューチン、MRI のセラピストの共通点と相違点について改めて整理している。それに加えて、カール・ウィタカーという米国家族療法界の最長老の一人を「米国で最も偉大なセラピスト」として紹介している。ウィタカーは、精神療法を芸術であると考えている。そして、禅から学ぶことが多いと言っている。生きること、行為することをセラピーの過程で重視する。アーチストとしてのセラピストの生き方は、家族に対しモデリングの機能を果たす。そして、アーチストとしての自由を守り、セラピーを楽しむ (Exciting) ためにもコセラピーをするか、チームアプローチをとる。そんなわけで、家族療法チームについておわりに述べられており、アッカーマン短期療法プロジェクトでの「ギリシャ・コーラス」技法を紹介している。それは、ミラノ派の「逆パラドックス」の一種であると著者は考えている。

さて、本書を読み終えて、評著が感じたのは、著者が最初から最後まで家族療法の紹介者の役割に徹している姿勢であった。本書を一冊読めば、家族療法の歴史、理論、技法、実際、効果、適応症、訓練などを、一望の中に収めることができる。それ以上の何かを望めば、それはぜいたくというものであろう。評者としては、割愛された数多くの価値あるアプローチを、次の機会に紹介してもらえたらと願うだけでなく、著者自身の実践を前面に押し出した著作をこそ、将来期待している。

長谷川啓三著『家族内パラドックス』(彩古書房, 1987, 228頁)

本書は、前述したMRIのジョン・ウィークランドとポール・ワツラウィックの両氏から推薦文を寄せられている。著者は、東北大学院を修了されEd. Dを取得。MRIで訓練を4年前から受け、MRIの国際会議でも活躍されている。本書は仁愛女子短大在職中に書かれたもので、現在は、嵯山女学園大学人間関係学部家族心理学研究室の助教授である。

本書の構成は、推薦(3頁)、はじめに(3頁)、プロローグ 症例(1)反抗する娘、症例(2)登校拒否(11頁)、第一章 パラドキシカル・アプローチとは(12頁)、第二章 パラドックスの実習(1)——介入類型のすべて(12頁)、第三章 面接の手順(21頁)、第四章 パラドックスの実習(2)——介入類型のすべて(30頁)、第五章 パラドックスの不敗性と抵抗の利用(17頁)、第六章 パラドキシカル・アプローチの理屈とコツそして大衆演劇(24頁)、第七章 リフレイミングとリアリティ・コンストラクション(41頁)、第八章 登校拒否、出社拒否と三世家族の扱い方(33頁)、日本の家族療法およびそのトレーニングの受けられる機関(4頁)、あとがき(3頁)、参考文献(4頁)、図18・表2・イラスト11・漫画1・楽譜1である。

本書のねらいは、家族療法の「技法」の入門書としての役割を果たすことにある。前掲書が、技法を簡単に身につけることではなくて、システム論と家族療法の紹介をし、理解を深めることが目的であったのに対して、本書は、ずばり、実践できるようになることを期待して書かれている。著者は、面接場面だけに限らず、家庭や職場での人間関係の改善に、この「技法」を試してみるよう勧めている。日本人は、テクニックを軽視したり、その反対に秘術視し、名人芸として重々しく扱ったりする傾向があると厳しく指摘し、理論と技術は車の両輪として学問上に正当な位置を与え、もっと開かれたトレーニングを押し進めるべきだと著者は主張している。本書は、そんな著者の気迫と熱意あふれる本である。パラドックスとリフレイミング技法という二大技法が数多くの事例を通して、わかり易く、大変おもしろく書かれている。一気に読めるし、またそのあとで、何度も読み返したくなる本である。

斉藤 学著『嗜癖行動と家族——過食症, アルコール

依存症からの回復——』(有斐閣選書, 1984, 210頁)

本書の家族介入の技法は、P. スティングラスやD. デイヴィスらのシステムズ・アプローチによるアルコール症家族療法に、大きな刺激を受けている。また、遊佐安一郎の前掲書も、参考文献として掲載されている。さて本書の著者を紹介しよう。氏は慶応大医学部(精神医学)を卒業され、国立療養所久里浜病院でアルコールの治療に携わり、そこで、薬物乱用、摂食障害、盗癖、ギャンブル狂、性倒錯などの治療経験も積まれて、現在、東京都精神医学総合研究所の社会病理研究室主任である。また、明治学院大の講師も兼任され、「アルコール医療研究」誌や「アルコール研究と薬物依存」誌の編集にもあたられている。

本書の構成は、はしがき(7頁)、第一章 嗜癖行動とその修正(26頁)、第二章 不安と嗜癖(10頁)、第三章 怒りと嗜癖(21頁)、第四章 抑うつと嗜癖(21頁)、第五章 嗜癖者の嘘(13頁)、第六章 傷ついた自己愛(19頁)、第七章 怒りの渦巻く家(22頁)、第八章 家族がなすべきこと、してはならないこと(20頁)、第九章 回復のプロセス(24頁)、第十章 ある達成(18頁)、参考文献(2頁)、図4・表2である。

本書は、なかなかユニークな本である。まず、中年男性を中心としたアルコール症と若い女性たちから成る摂食障害を「嗜癖」という概念で括ろうとしたこと、最初に実践があり、あとから境界例や自己愛人格障害などの概念と嗜癖集団の精神療法技法を系統的に学び、理論構成されていること、各章の終わりに「ディスカッション」を設け、事例を5人に類型化して、質疑応答の形で、患者や家族同志の相互交流や著者の応答・介入が会話形式でわかり易く示されていることなどから、嗜癖問題に直接携わっている評者としては、実践的に最も大きな影響を受けた本の一つである。嗜癖に取り組むサイコロジストは、日本ではまだまだ少ないというのが現状である。著者は、初期介入、家族介入の実践から、飲みすぎ、食べすぎ、働きすぎ、浪費しすぎの背後にある心理分析を通じて、今日的な精神衛生の課題に迫ろうとしている。そんな労作に拍手を送ると共に、サイコロジストとしても、もっと多くこうした領域へ進出する人が増えることを願っている。

以上、三冊の本を評者なりに関連づけながら、家族療法の概論的な入門書、その中の一つの技法に詳しい実践

的な入門書、そして特殊な対象への家族療法の理論と実践の書を順に紹介した。

最後に、事典を二つ紹介しておきたい。両者共、1986年11月に相前後して、しかも同じ星和書店から出版されている。一つはアメリカ夫婦家族療法学会編著、日本家族心理学会訳編「家族療法事典」(145頁)で、もう一つは、石川元・松本真理子編著「家族研究・家族療法用語事典」(36頁)である。後者は、大原健士郎・石川元編集の「家族療法の理論と実際 I」の別冊付録である。前者は、翻訳であり、150語が日本語で50音順で並べられている。各語に訳註がつき、詳しい説明がなされている。文献(訳書・原著)、事項索引(邦文・欧文)人名索引がついている。装訂は箱入りで表紙は赤である。邦文索引が充実しており、欧文索引がやや貧弱である。一方、

後者は、原著であり、280語が欧文で abc 順に並べられている。一部に座談会を引用し、難解な用語の概念を正しく伝え、誤用を防止しようとしている。他は、概ね簡潔に用語の要点が解説されている。索引は邦文のみで、やや少なく、むしろ欧文の本文が索引としては、前者よりも充実している。装訂は付録ということもあって、本の裏表紙の内ポケットに入るように作られているが、表紙が薄すぎて、耐久性に乏しいのが残念である。せめて、本のカバー並の紙質で表紙を作ってほしかったと思う。両者共にユニークな事典作りをめざしており、座右に置いて愛用したい事典である。

初めての書評の機会を与えて下さった正田直先生に感謝致します。また、良書に巡り会えたことと、それを紹介してくれた仲間達に感謝の意を表する次第です。